

設楽戦国時代の城砦めぐり

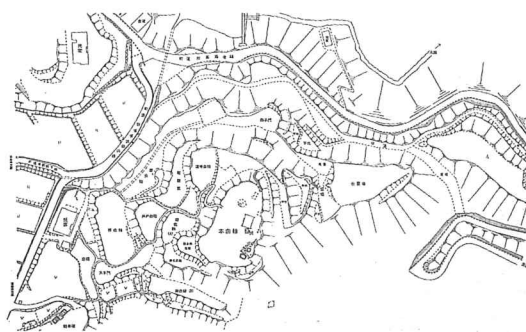
はじめに

近頃、戦国武将やお城の話題が多くマスメディアに取り上げられ人気を集めています。私たちが暮らす奥三河では、江戸時代に築かれた壮大な石垣や天守のある城はありませんが、戦国時代に多くの城砦が築かれていました。北設楽郡史には、町内だけでも城跡十七ヶ所、砦跡八ヶ所、物見跡七ヶ所が記述されています。この記述をもとに二十年ほど前から現地調査実測を行ってきました。今回は、町内三地区の城砦跡を紹介してみます。

田峯地区

田峯城は菅沼氏が文明二年(一四七〇)に築城したといわれ、城とその周辺の地形から大蛇の風貌に見られ、蛇頭城とも呼ばれている。田峯の菅沼氏は、新城方面に一族を配置させ勢力を拡大し、作手の奥平氏や長篠の菅沼氏と共にこの地方で勢力を誇り、山家三方衆と呼ばれていた。やがて今川・織田・武田の大勢力の勢力争いに巻き込まれ、一族が分裂し敵味方となつて争うこともあった。その結果、天正三年(一五七五)長篠設楽原の戦いでは、武田氏に与し、田峯の菅沼一族は衰退し城は廃城となった。

田峯城は、田峯集落の東南に位置する小高い丘に築かれてい



田峯城縄張り図

る。二百メートル四方の規模で、北は自然の堀を巡らし、南は標高差二百メートル下の寒狭川、東は田峯川の自然の堀、西側に大手門を構えた。同心円状に曲輪が築かれ、空堀や堅堀が残り、戦国時代を代表する山城として有名である。城を中心に約七百メートル北に田峯物見石、北西約一・五キロメートルは田峯城ヶ峯砦、西側約一キロメートルに愛宕山砦と田峯平城、南約一キロメートルに高野砦、南東に寒狭川の対岸になる須山物見石砦と城ヶ根砦、北東に清崎砦などの城砦によって情報網が作られていた。

名倉地区

寺脇城の築城については、後藤弾正・名倉奥平氏が知られる

が、明確な資料がないため定かではない。作手奥平氏二代貞久の六男である喜八郎貞次が名倉村に住し、名倉奥平氏の祖となった。二代信光は永禄元年(一五五八)名倉の船戸橋の戦いをはじめ、各地に転戦した記述が残されている。その後、慶長五年(一六〇〇)関ヶ原の戦いに参戦後、尾張清洲に移つたため城は廃城となった。

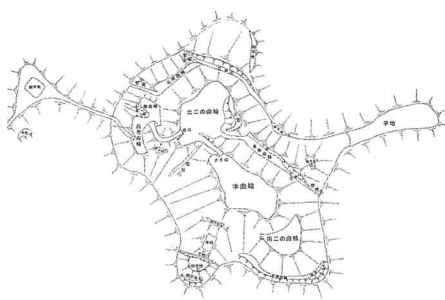


寺脇城縄張り図

寺脇城は名倉地区の中心部に位置し、寺脇の八幡神社から約三百メートル北東の高台に築かれている。百五十メートル四方の規模を持ち、本曲輪を中心に南と東方面に曲輪が広がり、土塁や空堀が残る。また、この城の北東に標高八百八十一メートルの山頂に詰めの城である浜城が築かれている。城を中心に南東約三キロメートルに鍛塚城、中間点に繋ぎの城法華城、西側約一・五キロメートルに湯谷城、その奥に小鷹城、北側に清水城・黒石砦・岩伏砦、東側に矢筈砦を築き、本城の周りに城砦を巡らした守備となつている。

津具地区

津具城の築城年代は不明であるが、城主は後藤九郎左衛門善心で、天文十年(一五四一)から永禄十二年(一五六九)頃、津具方面に勢力を張っていた。永禄十二年(一五六九)頃、武田氏に属していた善心は、松平氏に属していた作手の奥平貞能と名倉の奥平信光に攻められ落城した。この時善心は討ち死にし、三男安乗は信州に逃れ、縁籍にあたる小笠原氏を頼つて落ち延び、城は廃城となった。



津具城縄張り図

津具城は下津具の北西寄りにあつて、津具集落では中心部に位置する。津具総合支所より県道東栄稲武線を東栄方面に約一キロメートルの麓地内にある。ここは通称「城の腰」と呼ばれ、県道北側にそびえる標高七七〇メートルの山頂部に築かれ、曲輪や土塁、小規模の空堀や堅堀が残る。津具城址から周囲を見渡せば、下津具のほぼ全城を望むことができる。西側約二キロ

メートルに三本松砦、南側約一キロメートルに平山城ヶ峯、南東約三キロメートルに大峠砦、東南東約二キロメートルに白鳥山城、各城砦から津具全城の様子が伝わってくる。

おわりに

今でも多くの城砦が山野に埋もれ、残念ながらその場所もごく一部の人にしか知られていません。貴重な文化遺産ですが、四百年以上の歳月と共に忘れられ、また無くなってしまうものもあります。少しでも多くの人の記憶に残されるよう、楽しみながら散策をし、城砦巡りをしたいものです。

(設楽町文化財保護審議会委員 加藤 博俊)